

昭和六十二（一九八七）年

市民待望の地下鉄有楽町線が実現 銀座への直通が実現

「これを機にまちがガラリと変わり、名実ともに町から市へと変貌したと思う。銀座駅のホームで『和光市駅行き』という電光掲示板を見たとき、感動したことを覚えている」

こう語るのは、和光市商工会の斎藤和康会長だ。この言葉は、和光市民にとって昭和六十二年八月二十五日の地下鉄有楽町線（以降有楽町線）開通がいかに大きな出来事であったかということ物語っている。

和光市民が長年待ち望んでいた有楽町線の開通により、東武東上線との相互直通乗り入れが実現し、乗り換えなしで都心へ直行できるようになった。和光市と新富町間の二・四キロを四一分で結んだ。

都心直行、ラッシュ軽減、急行停車など、都心への通勤・通学が一層容易になった。こうした市民の日々の暮らしが便利となると同時に、有楽町線の乗り入れが和光市のイメージアップに大きく奏功したことも事実であった。冒頭に記したように、沿線上の都心の各駅で「和光市駅行き」と表示されることがその代表例である。これによって、和光市の存在を多くの人が知ることとなった。そのインパクトは極めて

大きく、さらなるまちの発展が期待された。

また、有楽町線開通に合わせ、九月には駅構内に和光市役所連絡所が設けられ、各種手続きができるようになった。

そして、有楽町線開通を機に、十月、丸山台土地画整理事業が着工し、さらに和光市駅前広場（南口）修景計画案がまとまった。これらの事業の進捗とともに、和光市の中心市街地は激変を遂げていく。有楽町線開通時点で和光市駅の周囲は、どこにでもある地方の田舎町といった風情であったが、丸山台土地画整理事業はそんな和光を一変させる一大事業となっていく。

この年四月、市内二校目の高校となる県立和光国際高校が開校した。普通科、外国語科、情報処理科の三科を有し、校名どおりに外国語教育を重視し、初年度から米国ワシントン州ロングビューのマークモリス高校との間で交換ホームステイを行った。

五月、市民が待ち望んでいた和光市運動場が米軍基地跡地にオープンした。前年の昭和六十一年には和光市体育賞も制定されるなど、和光市はスポーツが盛んなまちでもあったが、公営のスポーツ施設が



和光市運動場オープン記念

少なかった。野球大会や市民体育祭の会場探しにも難儀する状況であった。真に市民のニーズに応え、利用しやすい施設づくりを目指し、全国的にも稀だったグリーンサンド※①を採用したことで、和光市運動場は野球に加え陸上競技もできる多目的運動施設として誕生したのである。一般的な、内野が土、外野が芝生の野球場では陸上競技はできないが、内外野の段差がないため陸上競技も可能であり、メンテナンスも容易となった。

一方、昭和六十二年の社会情勢を見ると、四月には国鉄の分割・民営化によるJR各社の発足が大きなニュースとなった。十一月には、日本航空が完全民営化した。民営化など一連の行政改革を主導し、戦後三位の長期政権となっていた中曽根首相が退任し、十一月、竹下登内閣が誕生した。

また、都心を中心とする地価高騰が続き、地方に波及する動きが見られるようになった。十月にはニューヨークの株式市場が昭和四年の恐慌を上回る大暴落となり、「暗黒の月曜日」といわれた。東京市場も過去最大の下げ幅を記録した。ここを底に、平成元年にかけて株価は右肩上がりに上昇し、人々はバブル景気を実感するようになっていく。エイズ感染の広がりが話題を集めたのもこの年のことであった。

昭和六十二（一九八七）年の歩み

- 三月 和光市駅北口を開設
- 三月 柿ノ木坂湧水公園が完成
- 四月 県立和光国際高校が開校
- 五月 和光高校吹奏楽部が全国大会に出場
- 五月 和光市運動場が完成
- 五月 福祉施設「さつき苑」を開設
- 八月 第二中学校女子バスケットボール部全国大会に出場
- 八月 地下鉄有楽町線開通
- 八月 有楽町線開通記念商工祭が開催
- 八月 和光市駅構内に身障者用エレベーターを設置
- 九月 第一回健康まつり開催
- 九月 第三中学校男子庭球部全国中学校軟式庭球大会で個人、団体戦ともに優勝
- 九月 市役所駅連絡所がオープン
- 九月 人間ドック検査料の補助を開始
- 十月 運動場で初めての市民体育祭
- 十月 練田児童遊園地が完成
- 十月 丸山台土地画整理事業着工
- 十月 和光市駅前広場（南口）修景計画案
- 十一月 住民情報オンライン業務の一部が開始

※①グリーンサンド 輝緑岩を粉砕加工し、最大粒径二・五mmに粒度調整された緑色の天然クレー系舗装材である。適度な弾力性を持ち人体への負担が軽くプレー後の疲労感が少ない、自然な緑色で目に優しい、排水性が良好、安定感が高く損傷や表面の摩耗も少ない、といった特徴を持つ。球技コート、陸上競技場、学校運動場、多目的広場など、多彩な用途に利用される。



丸山台土地画整理事業
（上：工事中、下：整備後（平成2年）の様子）



地下鉄有楽町線が開通

平成元年（一九八九）年

新たな時代の幕開け 田中市政がスタート

昭和六十四年一月七日、一つの時代が終わりを告げた。

昭和天皇が崩御され六〇余年にわたる昭和が幕を閉じたのだ。同日、皇太子・明仁親王が皇位を継承され新天皇に即位した。翌八日、新たな元号「平成」の時代が幕を開けた。

バブル経済に沸く中、消費税が導入され税率三割で発進したのは、平成元年四月のことであった。消費税により景気の悪化が懸念されたが、この時点での日本経済は株高と不動産高が堅調であり、不況の兆しはうかがえなかった。同年十二月二十九日には日経平均株価が史上最高値の三万八千九百七十四円を記録するなど、日本のバブル経済は最高潮に達した。

海外に目を転じると、日本を取り巻く国際情勢は急速な変化を遂げつつあった。

四月、中国で民主化運動を武力で弾圧する天安門事件が発生した。十一月には東西冷戦の象徴だった「ベルリンの壁」が崩壊し、翌十二月には米ソ首脳がマルタで会談、冷戦の終結が宣言された。

国内外が急激に変化する中、和光市でも大きな変

化があった。五月に市長選が行われ、市制施行時の昭和四十五年から一九九年にわたり市長を務めてきた現職の柳下潔市長を田中茂が破り、第二代市長に就任した。結果は、田中茂九四五〇票、柳下潔六四八一票、富沢実四八二二票であった。

柳下市長は大和町時代の昭和四〇年から二四年にわたって、著しく成長する本市の舵取りを行った。米軍基地跡地問題の解決と地下鉄誘致成功に導き、和光市発展への道を切り開いた。

この年四月には和光都市計画地区計画が決定、和光市駅南口の開発構想が固まり、長年県に要望していた和光市駅の派出所が完成した。翌五月には長期にわたり開発と課題解決への道が模索されてきた東京外かく環状道路（以降外環道）が着工となった。さらに、松ノ木島土地地区画整理事業が完了した。

一方、外環道建設に伴い、移転となる本市庁舎・市民文化会館の建設審議会から中間答申が出され、住環境になじむ景観、障害者・高齢者など社会的弱者への配慮、ハイテク化や省エネルギー化、緑地の確保などが盛り込まれた。

また、新庁舎は市内中央部よりも南側に位置する

ため、北部住民の利便性を考慮し、市役所の牛房出張所と吹上出張所を市庁舎完成に先んじて開設するなど、本市のインフラ整備に尽力した柳下市政が目指したまちづくりが、まさに完成に近づいていた年でもあった。

新たに就任した田中市長は、医療法人を経営する現役の医師でもあった。就任時は、外環道の通過に伴う上部蓋掛けの利用や市役所・市民ホールの建設、



吹上出張所

牛房出張所

駅前広場を含めた丸山台土地地区画整理事業、中央区画整理事業、総合体育館の新設などのハード・インフラ面の整備が進行するとともに、新たに「高福祉、高教育、好環境」の実現という理想を抱いていた。就任翌年の新年の挨拶では「明日の和光市を大きく、国際社会の中でリーダーとしての人材を育成することのできる教育環境の実現、そして和光市に住んで本当に良かったと実感することのできる、やすらぎと活力に満ちた質の高い居住環境の整備、さらには他の国に類を見ないスピードで迫る高齢化社会

を迎え、市民の皆様が安心して生活することのできる各福祉制度の充実したまちづくりに努めてまいりたいと考えております」（『広報わこう』平成二年新年号）と語った。田中市長は、この理想を実現すべく、和光市に新たな風を吹き込んでいくこととなる。



第1回市政対話集會

平成元年（一九八九）年の歩み

- 三月 県営和光樹林公園の一部が開園
- 四月 付添看護料貸付制度がスタート
和光市駅前に派出所を設置
本町保育クラブ開設
- 五月 住宅巡回入浴サービス事業を実施
市長選で田中茂が当選
- 八月 第一回市政対話集會を実施
- 九月 白子川改修工事竣工。白子橋完成
牛房、吹上出張所オープン
- 十一月 うけら庵を再建（本町）
- 十二月 大字新倉地域の一部を町名変更
松ノ木島土地地区画整理事業が完了



松ノ木島土地地区画整理事業竣工式



外環道の工事の様子（平成元年）



外環道大泉-和光間開通（平成4年）